

博士論文審査書 (課程博士・論文博士)

論文名	満洲児童文学研究			
	(英文タイトル)	Children's A Study of Manchurian Literature		
学生番号	95313001	氏名	寺前君子	
所見	別紙、「論文内容の要旨および審査結果の要旨」のとおり			
審査結果	⊙	否	学位記 番号	第 14 号
主査	白田 兆子 ⊙		副査	⊙
副査	磯田 一雄 ⊙		副査	⊙
副査	加藤 康子 ⊙		副査	⊙
論文提出日	論文審査日	公聴会	可否決定日	博士学位授与日
2013年11月27日	2014年2月20日	2014年2月22日	2014年3月5日	2014年3月18日

## 論文内容の要旨および審査結果の要旨

旧満洲（中国東北部）植民地化への動きは、日清戦争に始まり、租借地、関東州都督、南満洲鉄道株式会社（1906年設立）、領事館で進められ、1932年傀儡国家、満洲国の建国、敗戦で消滅へといたった。本論文は、植民地満洲で誕生、発展した、日本人が日本人の児童・生徒のために日本語で書いた児童文学（満洲児童文学）を研究したものである。満洲で刊行された資料は日本国内での閲覧が困難なうえ、大連図書館の所蔵資料が未公開なため、これまで十分な研究がなされてこなかった。本論文では現地で発行された『年鑑』、邦字新聞、雑誌を、可能な限り現物で確認する綿密な基礎作業がおこなわれている。研究対象としたのは、1913年頃から1939年頃までの26年間で、（1）満洲児童文学の萌芽期（1926年頃まで）、（2）石森延男の渡満時期（1926年～1939年）、（3）石森以外の児童文化・文学活動を取り上げた5部構成であるが、研究の中心は石森在満期間の仕事と活動である。

萌芽期の第Ⅰ部は、満鉄による日本文化の移植と文化環境の整備としてなされた、1913年と1926年の巖谷小波招聘を取り上げ、初めてその全貌を明らかにした。小波の招聘は、満洲においてはお伽噺の口演を広め、お伽噺受容の土壌を作り、内地においては新天地を広く紹介する役割を果たした。第Ⅱ部では、マス・メディアが果たした役割を「満洲日日新聞」（のち「満洲日報」）の「子ども欄」に着目して、緻密な考察をしている。「子ども欄」は、皇民教育に力を入れ、子どもたちが活字に親しむ機会を与えるとともに、児童作品を掲載、書くことへの意欲を喚起した。また、児童文学作品発表の場を提供することで、児童文学の書き手を育てたと位置付けている。

石森延男の渡満に始まる第Ⅲ部は、①教科書編集部時代、②視学時代、③大連彌生高女教諭時代の3期に分かれている。『満洲補充読本』（全8巻）編纂のため渡満した石森は、教科書編纂の他に満洲初の中学生向け雑誌「帆」と満洲読物『まんちゅりあ』、同人雑誌「新童話」を自費出版している。児童・生徒に、郷土満洲の自然や風俗に着目させ、その良さを発見させようとする作品が掲載されていた。視学時代では、編纂した「満洲文庫」（東洋児童協会）全14冊より、文学編『童話と童詩』、『満洲新童話集』の掲載作品が対象となっている。なお『満洲新童話集』は、平方久直「軍人の子」収録が原因で発禁処分になったとされてきたが、検証の結果、のちに日本で出版された「新満洲文庫」が問題視されたとの結論にいたっている。高女教諭時代では、「満洲日日新聞（夕刊）」に連載された「もんく一ふおん」を取り上げ、離満後に加筆、東京で出版された『咲きだす少年群』（1939年8月）との比較検討を行い、当時の日本社会が求めていた、満洲・支那大陸のものであったことを検証している。郷土満洲に愛着を持たせようとする石森の意識は、在満期間を一貫しており、常に日本人の児童・生徒に注がれており、満洲人の現実や思いに触れた作品を生むことはなかった。ここに、大連の日本人街に住み、国策遂行を求められる公職にあった知識人、石森が書いた満洲児童文学の良心のあり様と限界があったといえる。

第Ⅳ部では、石森と交流のあった2人の日本人の活動を取り上げている。1つは撫順で、教育者、寺田喜治郎の活動から生まれた児童雑誌「コドモ満洲」である。新聞記事から世の中の動きに関心を持たせ、日本の良質な文学作品に触れさせようとする姿勢は、石森とは異なる視点であった。第Ⅴ部では、満洲で育った児童文学作家、山田健二を取り上げている。満鉄技師の傍ら、創作、口演童話、ラジオ放送に関わり「書く童話」と「話す童話」の融合を目指した。国策に沿った啓蒙的「美談」が多いが、鉄道付属地に住む日本人の子どもの日常や心情を描き、ともに暮らす満洲人の子どもの姿も描いた。

口述審査では、基礎資料の調査、収集を全員に高く評価された。磯田一雄先生からは、石森の児童文学活動の実証的検証の姿勢を評価され、とくに『咲きだす少年群』の改作・改題の究明を功績とされた。満洲児童文学は、石森の渡満に始まり離満で終わったとの指摘があった。加藤康子先生からは、タブー視された時代の作品の質を見直す研究の可能性を示唆しているとの評価を受けた。最後に、資料の読み込みと活用、論展開に検討の余地があるが、この領域研究の基礎論文であるとの講評をいただいた。